



あん・まくどなるど さん

国連大学高等研究所いしかわ・かなざわ
オペレーティング・ユニット所長



ご自身を『空の人間』とおっしゃるあんさん。

自然界で“体験すること”が、生物多様性を理解する上でとても重要だと強調されます。生物多様性に対する人々の考察の鋭さを、言葉、帯留め、和菓子などを通じて、楽しく話していただきました。

子供の頃、どのような環境で育たれましたか。

カナダの郊外、今は都市化してきていますが、子供の頃は自宅からちょっと行くと林があって、自転車でちょっと行くと牧場があったところまで育ちました。“平原地帯”の空のもとで育ったので、今でも空を見るのがすごく好きで、落ち着きます。自宅の裏庭は、欧米では普通芝生なのですが、父親は自分の食べ物はある程度自分の手で作らなければいけない人でしたから、一部を畑にして7人家族の1年分の野菜を作りました。サラダ用の生野菜は店で購入しましたが、それ以外のインゲン、カボチャ、トウモロコシなどは基本的に全部栽培して冷凍保存しました。苺、木苺、リンゴなども同様です。

冬になると父が水を撒き、家庭菜園はスケートリンクに早変わりしました。我が家では子供たちがずっと家にいるのは健全ではないから、学校から帰るとまず外で遊びなさいというのがルールでした。北国なので、学校から帰宅する夕方5時ぐらいにはすっかり日は暮れて、キラキラ輝く星空の下でスケートをしたりして過ごしました。風景を見るときには、陸とか海の風景だけじゃなくて、空も風景の一つですね。自分はいかに『空の人間』だったかということを感じてきました。

父親は体験が大事と考える人間でしたので、夏休みは父親の生まれ育った祖父母の牧場に行き、牛を放したり、乳搾りをしたり、豚と鶏の餌をやったりといろいろ手伝いました。子供だったので、嫌々の部分は結構ありましたが、今になってすごく恵まれた家庭教育を受けたなと両親に感謝しています。

高校生の時(1982年)に交換カナダ留学生の第1号として来日されましたが、日本に留学したいと考えられたきっかけは何ですか？

私はカナダで生まれ育ちましたが、母親がアメリカ人だったので、アメリカへ行ったり、研究者の父親がメキシコシティで開催された学会に出席するため、カナダからメキシコまで裏道を通りながらぐるっと車で一周したりしました。また小学校高学年の時にはスウェーデンで暮らし、キャンプをしながら北欧を隅々まで回りました。家庭で購読していたナショナル ジオグラフィック誌を見て、広い世界のいろんな暮らしぶり、自然界、民族衣



装などに興味を持ちました。別世界に行って違う視点から世界を見たい、何となく西の反対の東に行けば、別世界に行けるんじゃないかなと思いました。西洋とは違う世界に行きたくなったんです。15歳になって、高校の留学プログラムに申請した際は、モンゴル、チベット、ネパールに希望を出しました。ところが、アジア留学の前例がなかったため、行き先を変更するように言われ、やむなく希望先をヨーロッパ、アフリカと書きました。しかし、ある日突然電話がかかってきて、日本へ行きませんかと言われ、行ってもいいかなと思ったんです。

何故日本にあまり行きたくなかったのか。実はうちの家族で誰も行ったことがない国に行きたかったんです。以前父親の学会が京都大学であり、両親は日本に来たことがありました。それは、結婚後の遅い新婚旅行をかねたものでした。

高校の交換留学生、熊本大学への1年間の国費留学、長野県の「^{とむそうやじやく}富夢想野塾」とどんどん日本への関わりが深まりましたが、その中で“日本の農村で民俗学のフィールド・ワークをする”スタイルは自然にできあがったのですか。

熊本大学に留学した2度目の来日の際(1988年)、熊本の農村に行ったことが転機だったと思います。先輩の紹介で^{はくさ}藪草農家に8日間ホームステイしましたが、機械化していなかった時代だったので、労働力として人の力を使うということが非常に面白く感じられました。また、農家の方に戦前からのいろんな話を聞かせてもらい、水道・電気がまだなかった時代に育った私の父親と重なるところがありました。子供の頃から祖父母の話を聞くのが好きでし、^{オラルヒストリー}口述歴史学に興味があったので、フィールドで生きた歴史を自分の耳で聞きたいと思いました。

社会変動の凄まじい日本を、大都会から見のではなく、農村から見てみようと思いました。その理由は、私は他の人たちがやることを一緒にやるのがあまり好きなタイプじゃありません。ちょうどバブル時代でしたので、海外から来ている学生たちの中には、日本の経済成長の秘訣を学んで帰りたいという人が多くいました。

日本は農耕民族とよくいわれますが、急激な経済成長の裏で、農耕民族のベースである農村に行き、失ったものについて探ってみようと思い、熊本県から長野県に移りました。

長野県に行ったきっかけは、あまりにも運が良すぎるとは思いますが、たまたまある知り合いの日本人に夢について語ったら、知り合いから田舎でサテライト・オフィスを開いて本作りの実験をしたり、民俗学、農村学、農村塾みたいなことやっているけど紹介しましょうか、と尋ねられたことです。それが清水弘文堂書房が経営していた「富夢想野塾」でした。

今では考えられないことですが、当時は、信濃町役場に行って明治生まれの職人さんのリストをお願いするにも、時間をかけ、何度も足を運んで、ようやく数人のリストをいただくことが出来ました。その頃は、日本語が上手に話せなかったため、電話をかけてもすぐに間違い電話と勘違いされました。清水弘文堂書房の社主・磯貝浩氏の叱咤激励を受け



つつ、役場が教えてくれた有名な職人さん、例えば機械化しなかった野鍛冶屋さんや桶屋さんなど、後は歩いて行くうちに紹介してもらったり、試行錯誤の中で、いろんな人たちと出会えました。

その中で感銘を受けたのは、明治生まれの方々がしっかり自分の意見や世界観を持っていたことと、子どもの頃を振り返り、日露戦争ですとか大変な時代を乗り越えて生き残ってこられた話を聞かせてもらったことです。例えば、あの時代と今の時代の豊かさについてや、戦後日本が歩んだ道をどう思うかなどについて。昔の農山漁村の職人さんは、“常民¹”のための伝統工芸じゃなくて日常用品を作ったんですが、そうすると昔の暮らしについてある意味で専門家です。竹細工師、桶屋さん、機械化しなかった野鍛冶屋さんとか、当分の農作業には必要な道具作りとか、彼らは結構身近にある自然のものを使って物を作りますが、周辺の自然界との対話をずっとやってきた人たちだったので、暮らしから戸隠や信濃町というところの自然界に関するいろんな知識・智恵を豊富に持っていました。よく彼らに言われたのは、季節の移り変わりのちょっとしたこととか、昔お金がなかったから、お金がない時代にどうやって生きるのかということで、自然と上手く対話し、自然と共存・共生しないと生きていけないということです。

日本は高度経済成長の中で経済力は手に入れることはできましたが、自然から学んだ智恵を失ったような気がします。勿論、日本が先進国になり豊かになることはだれにも否定し得ないことですが、東洋の文化を失って欲しくはありませんでした。日本流の魂を失うまでしなければ先進国になれなかったのか、先進国には欧米型とは違う、多様性があったいいのではないかと思いました。

私は“里山里海”にこの職場で初めて接することになるんですけど、里山里海論、SATOYAMA イニシアティブに大いに期待していて、欧米とは違う世界観・自然観が、やっぱり今ないといけないと思います。先進国になったら、全部“もの”でなければいけない、それはあまりにも寂しいです。

『原日本人挽歌²』という本の中で紹介しましたが、戸隠最後の藁草履編みのおばあさんや、最後の手打鎌鍛冶の名人（中村与平さん）との出会いは、最後のチャンスだったんです。もう亡くなられました。ただ、この前信濃町のホームページで、中村さんのふいごのあった作業場を町が保存していることを知りすごくうれしかったです。私の若い頃はバブル時代ですからああいうものは全く評価されませんでした。私はそれにすごく危機感を持っていました。よく役場に行って、中村さんが亡くなられたら作業場を博物館にしますかと問いかけると役場の人から変わり者扱いされました。

今の時代はすごく良いと思います。バブル時代は無差別に古いものは捨てるという社会でしたが、2千年のすばらしい歴史を持っている国ですから、過去を見直していけば新しい

¹ あんさんのコダワリ用語のひとつ。『常民 じょうみん 日本民俗学は常民文化を研究する学問であるが、その資料を保持する人々が常民である（野口武徳）』（『大日本百科事典』小学館）が『原日本人挽歌』83頁の脚注に記されている。

² 正式名称は「ぐるーぶ・ばあめの本 富夢想野帖シリーズ vol.4 DAY'S PAST - BODY AND SOUL Japan's countryside story 原日本人挽歌」、1992年に懶清水弘文堂から発行された。



未来を見つられるんじゃないかなと思います。ただ、里山里海論を語る時に気をつけなければいけないのはノスタルジックに、古き良き時代がすべてだとならないようにすることです。逆をいえば、現代科学（modern science）は万能ではなく、昔の知識（traditional knowledge）との融合が重要だと思います。

生物多様性の重要性について、一般の方に理解しやすくするためにどのような説明をされていますか。実際に話される際の工夫などについて教えてください。

例えば、農具の鋤のハンドルや竹細工師が使うタケにしても、使う目的によって柔らかいものが良いとか、堅いものが良いなどの違いがあります。道具によって適切なものが全く異なってくるので、いろんな樹木やタケが育つことが大切です。

また、農業を例にとると、昔は畦道で豆を作ったり、焼畑では、少量ですがいろんな種類の雑穀を作って、厳しい自然界の中で生存力を獲得してきました。考えてみれば持続型食料づくりの大事なポイントはいろんな物を作ることじゃないかなと思います。

先ほど、1989～1992年の3年間をかけて信濃町と戸隠をベースにして出会った職人のお話をしましたが、3年前に戸隠を再訪した際、職人の違いに気づきました。昔の職人は持っている知識がすごく豊富で学際的でした。例えば、空を見て今から雨が降るとか、明日は雪だとか。昔の日本では季節を二十四節季に分けていたのですが、気象の話も出来るし、どういう植物がこの時期に咲くとか、細かい知識を持っていました。ただ語るだけでなく、知識とともに生きていました。

日常生活の中で、内面に生物多様性の重要性を認識して生きるということは、今の先進国にいる我々に求められています。その上で、野外教育が凄く大切だと思います。子供の頃の話に戻りますが、カナダで零下25度の中、ウィンターキャンプに行って、湖に穴を開けて釣りをし、その後、火を起こし、焼いて食べました。零下何十度の中で火を起こすのは大変です。最後はアウトドアの先生がいろいろやってくれますが、そういう体験がものすごくよかったです。生物多様性と口でいろいろ言っても、まずは自然界の中において体験することがとっても重要です。

また、日本の“食育”において、特に小学校の頃は土づくりから始めることが大事だと思います。落ち葉が手っ取り早いですが、最近、牡蠣、貝や昆布を使うとか、そういうことからスタートすれば良いのではないかと思います。

教養人を如何に育てるか。教養人は自然界の他、美術、音楽、思想学、歴史など勉強するし、そういう教養人作りを小学校から育成するプログラムを作れば生物多様性を内面の認識に持つ人がもうちょっと育つんじゃないかなと思います。

日本語を勉強して、季語が好きになりましたが、昔の人は物凄く自然界を観察したと思います。中公新書に高橋和夫氏が著した『日本文学と気象』という書籍があり、万葉集の中で「霧」という言葉が出てくる句について、東日本と西日本に分けたところ圧倒的に西日本が多く、それを現代気象学の技術で調べたら同じ結果だったそうです。自然を考察し、



自然と対話する中から、共存・共生の考えが生まれてきますが、私は言葉・文学に非常に興味持っています。荒井和生氏と野呂希一氏による『言葉の風景』や、今森光彦氏の『里山のことば』は大好きです。自然界を表す言葉の中にもものすごく自然界の考察があります。日本語から、言葉から学ぶことで、生物多様性は、より実感レベルで理解できると思います。

金沢に来て、文学だけじゃなく、帯留めや和菓子にも関心を持つようになりました。帯留めの中には自然界への鋭い考察があり、和菓子は季節によって食材や自然界のモチーフが変わります。要するにいろんな角度から生物多様性の目を覚ませることが大事です。

里山・里海の保全に係るこれまで・現在の取組について、簡単に教えてください。

たぶん、里山について語る人が多いと思いますので、里海に絞ってお話しします。2年前に環境省が「里海創生支援モデル事業」をスタートした時に、パイロットサイトを公募しました。広島大学名誉教授の松田治先生からお話を伺い、石川県庁の方、金沢大学の中村浩二教授と相談し、地元で運営委員会を設置し「七尾湾里海創生プロジェクト事業」を2年間実施しました。この事業は、七尾湾とその周辺海域において、地域住民の里海に対する意識の向上を図り、七尾湾を持続的に利用していくためのネットワークの構築をめざして、必要となる現地調査及びワークショップや体験学習プログラムなどを実施するものでした。

事業は今年の3月に終了しましたが、今から立ち上げようとしているのが「七尾湾里山里海創生研究会」です。学者だけでなく、地域住民、漁業者、農業者、林業家、ダイバーなどのマルチ・ステイクホルダーが一緒になって保全活動を考えようというものです。農林水産、環境、土木等の関係部局を巻き込んだ統合政策（integrated policy）づくりが大事です。研究だけとか、NPO、NGOのような活動だけでは保全はあるところまでしか出来ませんが、勉強会から国土保全に係る政策作りまで繋げて行ければと考えています。

私は、持続型第一次産業づくりが何より大事だと思います。環境に配慮した持続型の第一次産業づくりをしていくには、それを支える統合政策が大事です。森林税は高知県が始め石川県が19番目だと思いますが、私は森林税ではなくて里山里海保全税を作りたいと考えています。国土の4割が里山ですが、その資源を活用して保全していくための政策が作られ、税金がそちらの方に使われるようになればいいなと夢見ています。

もう一つ、里海について、今COP10名古屋に向けて取り組んでいます。日本の沿岸海域で暮らしている人たちがどのように海洋資源を持続的に利用してきたかということ、全国からケーススタディーを集めてみられたらと思っています。

お気に入りの里山・里海を教えてください。

能登半島全部が好きです。海では内浦（富山湾に面した海岸）・外浦（日本海に面した海岸）の両方とも好きです。内浦は静かで涼しく、外浦は激しい。半島を横切ると、短時間



で内浦と外浦の自然界の持つ顔の違い、色合いの違いが見られます。また、舩倉島^{へぐらしま}をはじめ離島も好きです。

里山では、白山山麓の白峰という集落で焼畑が行われているところがおもしろいです。焼畑の場所は30カ所ぐらいありますが、焼く場所を変え5年サイクルで行われます。山を見渡すと森林の遷移が見られます。100年間の人間の活動と関わった自然界を目の当たりにし、圧倒されました。循環型社会はこういうものなんだなと思いました。



2010.7.8 インタビュー

聞き手 田村省二 (COP10 推進チームリーダー)